

中央公論社
昭和四十六年八月二十五日発行
三輪 公忠 著

松岡洋右

その人間と外交

150781025 柴田 尚暁

第一章

1 明治13年3月4日山口県熊毛郡(現光市)室積23
松岡三十郎の四男として誕生

ア) 鎖国時代は北は松前、西は平戸へと航路開通

イ) 実家は由緒ある豪家維新後の国民経済の変転、
長州征伐の軍資金供出で斜陽

→父は出稼ぎで一年の大半、家不在

→母「麿」の存在“大”

ウ) 親戚の伝手でアメリカへ留学

第二章①

1 松岡の人間形成

ア) 渡米中の船内で島地黙雷から考察を吸収

→ 国粹主義、民族主義的情熱の高揚

イ) ベバリッジ夫人

→ 清らかな愛情を経験

→ ダンバー家事業に失敗、一時一家離散

第二章②

2 民族的偏見と民族意識の発芽

ア) 当時のアメリカでは中国人を主とした大量の移民

→ アメリカ市民一般の人種的偏見差別排斥運動

イ) 日清戦争勃発

→ 勝敗は外国在住者の社会的地位に大きく影響

→ 支那への勝利はアメリカへの勝利をも意味

第二章③

3 苦学

ア) 明治28年カリフォルニア州オークランドのハイスクールに入学

→ 成績抜群も1年半で退学

イ) 地元紙の編集者アブナー・B・ナイの元で労働

→ その後法律事務所、牧師の代役、労働に従事

ウ) ポートランドに帰還、昼は労働で学費を獲得

夜はオレゴン大の法科大学で学習

エ) 明治33年バーチェラ・オブ・ローズの学位取得

第二章④

4 外交の先輩との差異

ア) 小村寿太郎

「東部」ハーバード大卒、セオドアローズベルトと同窓生

→ポーツマス条約の仲介、アットホームな雰囲気

イ) 松岡洋右

「西部」オレゴン大卒、フランクリンローズベルトの政治顧問はほぼすべてコロンビア大教授

小村のように甘い関係で馴染むこと困難

第二章⑤

5松岡洋右のアメリカ人感

- ア) 脅迫されても自分が正義なら対決すべき
一度屈服すると二度と頭を上げること困難
対等な立場を所望なら対等な行動

第三章①

1 松岡帰国

a) 明治35年帰国母との9年ぶりの再会

ア) 変化: 陽気なチャレ、独立自尊の積極性、率直
さ

→ オレゴン大在学中も早稲田大の講義録を読み勉強
強

イ) 「国民之友」「太陽」「日本人」なども読書

ウ) 勉強するため東京本郷に移住

大学の授業無益だったため退学 → 翌年日露開戦

第三章②

2松岡の考え

a)一兵卒として犬死より他に可能性有

→外交官試験受験→合格、上海の領事官補に

b)そこで山本条太郎に相見(のちの満鉄総裁)

→三井物産上海支店の支店長

非常に明朗、常に上機嫌、男性的

意識的にものを我慢するとか辛抱するとかいう人
ではない



豪快にしてしかも俊敏な松岡

第三章③

3 後藤新平

a) 日露戦後満州での軍人の横暴な振舞を非難

→ アメリカが独仏紛争に介入、世界平和をかく乱

→ 日英同盟主軸 + 露独仏を編入、旧大陸同盟

上記に日中提携も包含、世界政策論

後藤が伊藤博文に進言

松岡が伝承

ロシア革命でその同盟論が消滅

第四章①

1ベルサイユ会議でアメリカがとるべき立場

→公平な調停役

a)WW1は独英の植民地競争が発端

ア)独英どちらも五十歩百歩

→「勝利なき和平」目標

→短慮で現実主義的考えの英仏伊日に強行

→解決を国際連盟に要求

国際連盟規約:公海の自由、民族自決を追加

しかし、アメリカ内部の反対で不参加

第四章②

2サイレントパートナー

→ 弁舌力、欧州情報とも貧弱

a) 人種的差別撤廃提案認不認可

→ 日本妥協的態度

b) 山東問題で日本が譲歩不可能をアメリカも認識

→ 今や列強の一端を構成の日本

国際連盟には必要不可欠

第四章③

3近衛論文「英米本位の平和主義を排す」

a)人間の平等感は民主主義、人道主義に起因

国内的には民権自由論、外的各国民平等生存権になる

•現状日本の要求は人種差別撤廃と経済的帝国主義の廃絶

→武力行使のみが生存権の脅威では非ず

第四章④

4近衛：特権階級に批判的

a)日本の資本主義的天皇制国家に反発

→社会主義に傾倒

→父の死後世襲制公爵議員

b)日本での革命は困難→国際社会で実現目標

→「和」が重視の日本民族固有の政治的遺産

第四章⑤

1 近衛の主張

a) 一次大戦の評価

ア) 植民地を「保有国」と「未保有国」の対立

→ 日本ドイツ側に組すべき

イ) 戦後米英中心の新体制構築

「持てる国」の利権を守る為「平和主義」を掲揚

人間は「平和主義」より「正義人道」が重要な場合

→ 国家間階級闘争平等な社会を樹立

第五章①

1 ワシントン体制へ

a) 幣原の成果で“平和？”が実現

→ 率先的な松岡は不要 → 退職

同時に九か国条約調印 ← 中国民衆のナショナリズムの高揚で日本の利権危険

1928年パリ不戦条約 → 一国の政策遂行理由の手段として戦争行使が非合法化

→ 中国の民族主義の勃興で日本の大陸政策に追い風 → 関東軍の直接行動で政界不安定化

第五章②

2 当時の日本の対満蒙積極論

a) 当時の関係者の考え

ア) 吉田茂

支那軍閥の横暴提訴

日本国の国権発動の必要性

イ) 森恪

満州の主権は支那、日本両国に存在

米英露が侵害の場合排撃行使と強硬な立場

第五章③

ウ)大川周明

将来的に自国内で自給自足可能な国

→“超大国”しか存命不可

米英露は十分超大国

仏はヨーロッパで一経済圏の構成のため奔走

日本は東西南を列強に制圧

情勢が不安定な満州を奪取

第五章④

エ) 石原莞爾

対米戦が発生なら持久戦は明白

満蒙経済的、軍事的に必要不可欠

→ 当時の満蒙積極論の最大公約数的な答

第六章①

1 欧米協調外交の後退

a) 柳条湖事件からの一連の事変の時流

→ 明確に九カ国条約、不戦条約に抵触

→ 国際的反応、未過剰

→ 幣原外交に期待

ア) しかし、若槻禮次郎内閣退陣

→ 犬養内閣発足も国内情勢不安定により未収集

第六章②

2 国外

a) アメリカ

スチムソン・ドクトリンで門戸開放を再確認

→ 入れ違いで錦州爆撃

アメリカの態度硬化

b) イギリス

第一次上海事変でイギリスの権益の中心地緊迫化

→ アメリカと同歩調

→ リットン調査団派遣

第六章③

3国内

a)十月事件、血盟団事件、五・一五事件発生

→政府機能の麻痺

→改革の兆し、国民期待

第六章④

4 松岡ジュネーブへ派遣

→ 不脱退の方針

a) 一緒に森恪、鈴木貞一、白鳥敏夫派遣

→ 国際連盟脱退の急先鋒

日本の立場：中国の横暴を非難

日本の主権守備の行動

欧米の思い：国際社会への痛烈な皮肉

→ 「盗人たけだけし」

第六章⑤

5松岡帰国

- 国民大歓迎、当時発生 of ファッショ化
政党解消運動を発起
- のちの大政翼賛会

第七章①

1 日独防共協定の推進

- a) 日独防共協定は日独伊露の大陸同盟の口実
この同盟をして米英と対抗するのが最善
←伊藤博文、後藤新平から受け継ぐ

第八章①

1 第二次近衛内閣の外相に抜擢

a) 英米主体の従来の主権守護の体制の破壊

ア) 日独伊露の大陸同盟を実行に移行

モスクワで協議→ベルリンで日独伊三国同盟締結←ベルリンで独ソ戦の発生が発覚

b) 三国同盟締結の失敗

ア) 独ソ戦の開始

イ) 近衛首相独自での米との交渉

第八章②

2外相である松岡への無報告

a) 近衛独自の外交による軋轢

→松岡との外交方針が真逆

近衛との摩擦増大

b) 松岡アメリカには一切の不妥協

→アメリカの再考

第八章③

3 三国同盟締結

a) 三国同盟締結に加え北の守備を完全

ア) 南進政策の日本

→ 妥協した米と和平交渉

イ) 中国からの撤兵を条件に米中は満州国承認

b) 米、近衛間で日米政府「了解案」を考案

→ 米、日本を三国同盟から離脱見据え

第八章④

4板挟み

a)松岡

ア)三国同盟締結十日ソ中立条約

→米英対決へ向け前進

→南進性格本格化

b)日米了解案

ア)米英と妥協

→対決思想の松岡と真逆

第八章⑤

5 帰国

a) 帰国途中で「了解案」の存在確認

→ 近衛との摩擦増大

b) 松岡の不覚地部分での行動

→ 近衛への不信感軽侮

6 独ソ戦、日米開戦

a) ドイツのソ連侵攻

→ 米英武器貸与法が制定 → 米の欧州戦介入本格化

第八章⑥

6米、英を支援

→米、独に宣戦布告

→三国同盟で日本も布告以外未余儀

7終戦

ア)松岡洋右、戦犯指定

→逮捕、しかし持病の悪化で非判決

→昭和二十一年六月二十七日死去

終章①

1 日英同盟の破棄、満州事変、国際連盟脱退

→ 国難打開を日独提携に期待

2 ジュネーブと三国同盟

a) 幣原外交の成れの果てから生じた満州事変の後
始末

b) 近衛の外交失策から生じた支那事変の立て直し
→ 国難の転換期

→ 選択肢は過少

終章②

3松岡外交の不理解

→外交の一元化の未実施

4松岡外交の支持者たちの本質の見極めも重要

結論「国民はたくさんの情報を収集

自ら精査」

「マスコミや政府発表だけの情報の鵜呑みは危険」